宗像

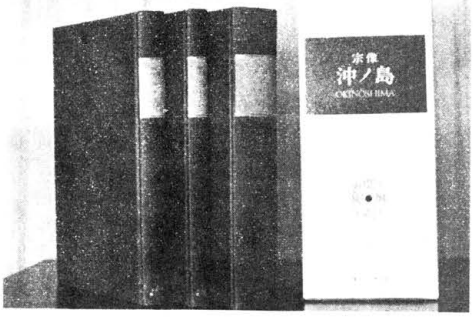
毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ②1311代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園一一三一（〒八一三）
電話福岡（九二）六五一一九四五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇四五）三二一一三四四・六〇六六番

玄界灘の孤島〝海の正倉院〟沖ノ島祭祀遺跡の全貌を収録

「宗像・沖ノ島」全三巻 刊行さる

――先に刊行の「沖ノ島」「続沖ノ島」と併せてここに完結――



この程「宗像・沖ノ島」が上梓刊行された。これは昭和四十四年から四十六年にかけて行われた第三次沖ノ島発掘調査についての学術報告書である。

当大社沖津宮鎮座地、玄界灘の孤島沖ノ島は古来神の島として畏敬され「おいわすさま」の別称のとおり、厳しい掟と厚い信仰により昭和の今日まで守り伝えられてきた神秘の島である。昭和十七年出光佐三氏は宗像大社復興期成会を結成され、復興事業の第一弾として神社史編さに着手されたが、その過程において宗像信仰の根源ともいうべき沖津宮古代祭祀解明の必要から、沖ノ島の学術調査が行われることになった。昭和二十九年から三十三年にかけて第一次、二次の調査が行われ、はじめてその全貌が明らかとなり、その結果五万余点の祭祀神宝類が発掘され、その多くは国宝、重要文化財に指定されるという質量共に群を抜く優品に学界は驚嘆し、一躍「海の正倉院」として喧伝されるに至ったことは広く周知のとおりである。そしてこの調査結果は「沖ノ島」「続沖ノ島」の報告書となって公刊され、学界に貢献するところ多大であった。

第三次沖ノ島調査は団長に出光佐三氏、隊長に九州大学教授岡崎敬氏を委嘱して行われたが、特筆すべきは昭和四十四年十月十一日三笠宮殿下が御渡島、沖津宮に御参拝され、親しく現地の発掘状況を御視察遊ばされたことであり、関係者一同終生忘れることのできない感激であった。第三次調査において五万余点の祭祀遺品が出土し、第一次、二次のものとそく遜色のない豪華絢爛たるもので、その中には唐三彩、奈良三彩、金銅製鞍頭といった超一級の優品が含まれ、その多くは昨年六月国の重要文化財に指定され、更には近い将来その中から右の優品は新国宝に指定される見通しである。

このたび刊行の「宗像・沖ノ島」は三分冊からなっている。執筆及び図版撮影は岡崎隊長以下十七名の調査隊員がこれにあたり、編集は座石法刊行会、印刷は東京の精興社が担当した。第一分冊「本文」は六二五頁で、報告編、考察編、総括編からなり厖大な多種にわたる出土品について詳細精密な分類記述と、内外各地出土品との比較検討が行われ、更に宗像祭祀の幅広い歴史学的考察がなされている。特に本調査により、岩上―岩陰―露天と古代祭祀の形態が時代と共に移行し、各時代毎に奉献品がまとまっている点、他に類例を見ない画期的な事跡が明らかとなり考古学界に神益するところは計り知れないものがある。

第二分冊「図版」は一九五頁で全頁にわたり出土品、祭祀遺跡、出土状況等が豊富な写真により系統的に分類掲示されている。

第三分冊「史料」は三七六頁、索引一五頁で沖ノ島の考古学的研究の参考に資するため編纂された、もので、宗像大神の出現、鎮座資料及び編年史料が網羅掲載されている。東海大学文学部助教授正木喜三郎氏の編纂によるものである。このたび刊行については考古学界の評価も極めて高く「超一級」の充実した学術報告書」との讃辞の書簡が数多く当社に寄せられている。

去る五月三十日、葦津宮司は復興期成会役員と同道して宮中に参内し、天皇皇后両陛下に特製天金本の献上を行い、更に翌日、皇太子殿下、高松宮殿下、三笠宮殿下、常陸宮殿下への献上を終えた。

「宗像・沖ノ島」の刊行は宗像大社復興期成会の復興事業掉尾を飾る偉業であり、時あたかも神宝館の建設と相俟って「海の正倉院沖ノ島」の真価を世に明らかにすると共に宗像大神の神徳発揚に資する意義は大きく、更には貴重な資料を後世に残し得たことに対し関係者の喜びも一入である。

昭和五十四年度 夏越祭・大祓神事御案内

拝啓

暑さも日毎に厳しさを増してまいりました。

さて恒例の夏越祭が近まってまいりました。この祭りは大祓神事を中心に行なわれ身心の罪穢を人形に托して祓い除き、清々しい気持をもって明日の生活を安らかにするための祈りをこめた祭であります。

本年も左記により斎行いたしますので皆様お誘い合せの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

六月吉日

宗像大社宮司　葦津嘉之

崇敬者各位

記

一、七月三十一日　午後五時　大祓神事　引続き　夏越祭

論説 自然開発論旨の底辺

近来の時代的傾向の中で特に目につくのは、わが列島の各地にあがる開発の声である。東京銀座や大阪道頓堀の昼夜人通りの絶えない繁華街を見る頭で、兎の走る田舎地を判ずるなら、未開にも可地にもなるだろう。文明開化のゆき過ぎ誤算も少からぬ会地に比して、農山村こそ民族の芳香を浄祖先の遺産と思う。

そうした芳香を強く感じ旧態古風を懐しむ人達は、自然を守る会とか野鳥保護の運動とかを提唱推進して、開発を抑えて人口比ようとさえ努める。開発の手のとどかない地域に、国土の文化的遺産があるとさえ考えている。

失業救済のため労働力を開発工事に吸収しようと計画される国策、凡て人が賛意を表してよいとは言えない。殊に近来の科学技術の飛躍的進歩による自然の風物破壊は、双手を挙げて歓迎すべきものでもない。ここにその開発論旨の底辺にある諸問題を発する必要が起ってくる。

最近報道された「湖底に沈む村の記録」と題する阪阜県某村の場合取り上げてみる。懐しい村里の風物が、ダム建設によって再び見られなくなる哀しみを、国のためなら広く社会の利益になるならやむを得ないと諦めて、純朴な村人の大勢が承諾しての計画が発足して二十数年になる。実施がのびのびとなってまだ始められないが、計画が中止されたのでも変更されたのでもない。雨来寺真器を離さず湖底に沈む村の姿を、また実施の暁には他郷に移住する里人の面影を、フイルムに収めて容らず老婦人があった。

ダム建設が終れば、人間にとって復帰する家はなくなる。毎日歩いた路も失われる。人間だけではない、村里に育った植物も動物もいずこかえ駆逐されてしまう。遠い先祖を祀る墓塔や、誓代々受けついだ鎮守の森の祭礼も残されない。老婦人のカメラはそれを捉えて活躍した。それが懐古に役立つ文化的遺産となるために。

山野を失う者自身が、思い出のよすがとなる物を遺さなくては、文学通り国家だけを推進する官庁や現場を管理する役人は、何の感傷も知らない。特にいずこの場合でも同じであるが、宗教関係の史蹟の破壊滅失は、筆舌につくせない痛恨事である。そこに自然を守る会の反発が生れる。

従って失業救済のための工事計画から開発と呼称して着手されるものに、破壊だけに終るかと危惧されるものがあっては許し難い。国家繁栄の目的に適い、国民生活安定に資するための開発でなければならないのである。なお現代内外の情勢では、政治上外交上の施策が主要なのほか国際的となってきたので、単にわが国土内のことであっても自国の利益だけを考えてはならない面も見られる。

ここまで開発論旨に入れるとなれば、底辺の処理もまことに複雑である。一般に、最も憂慮されるのが、宗教的意義を包括する景観の破壊と言われる。貴重な文化的遺産が喪失される。

一度喪失されては、後に専門家の指摘があっても如何ともすることは出来ない。最初の慎重な検討が要望されるのは、そのためで、自然を守る運動団体の意見は、面倒でも耳を傾ける必要がある。

初めに開発論旨の一例として湖底に沈む運命にある阪阜県の山村を挙げたが、次に明るさを加えて今多くの観光客を迎える天草を眺めてみよう。隠れキリシタンの悲史を記録する天草は、優美な五橋が船なしで肥後路からの車を通すようになって、見物など思いもよらなかった漁村が今を遊覧地と化し、脚光を浴びている。

五橋でつなぐ計画に、大部分の住民が双手を挙げて大賛成、関係当局は楽々と工事を進めたであろう。確かに見違えるほどの発展を見たのである。

一部の学者や宗教人が憂えたのは、天草の乱以後つづいた弾圧の陰にひそかに生きた信者の跡形が減失しないかということであった。結果は無難のようである。観客の落す金で、常塔関係者の生活は恩恵を受け悲史は明るさを加えているのが実情らしい。

ダムの底に沈む郷里の記録を残そうと努める人と、悲劇に散った信者の足跡に明るさを増そうと活躍する人々と、皮肉な底辺の持つ対象が感じられるのである。自然はできるだけそのままに、そこに生きる動植物もそのままに、との念願を時代の情勢の変化が転換することは難しいか。

（白鷺）

阿蒙少言

かなり古い話になるが、社会主義者として名のあった安部磯雄氏が亡くなった後、未亡人が語った話を思い出す「若し彼が私の夫でなかったら、私はこんな彼を尊敬したでしょう」と。この人にしてこの追憶談あり、真面目でその主張を自ら実行し一貫した人物として敬意を表したい◉妻をして心底からかく語らせる思想家が、今の時世にあるだろうか。何主義であれ、その信念と業績はかくありたいもの、秀れた人格が美しく光る◉明治初年に陸軍少将の欠員が出来た時、長老格の西郷隆盛に推薦を求めたところ、従道がよかと弟の名を挙げたのに対して不審が出た「諸君は少将に誰がよいかと訊ねているのだろう、従道が俺の弟か否かを問いにきたのではあるまい」と言下に弟の推挙を決めた。至公至正の私欲のかけらもない澄み切った泉の観がある◉人心は今や大きく変った。無智盲昧の群衆を羊飼いのように追う時代は、ハッタリが通りゴマカシが効いた指導でよかったが、大衆の尊敬に値せぬ母令者は浮屠にひとしい。私利金銭に結ばれた派閥に長い生命は望めない◉一度握った権力を背景に行政マン意識の旺盛な第二連の派閥リーダーは、世界各地に起る反発運動により姿を消してゆく。東南アジア中東等にその例を見る。近頃福岡で元高官の講演会が催されたのでお出席したが、心を洗ってくれなかった。社会主義者未亡人や西郷隆盛の話に比較するのは無理である。妻から死後尊敬される人物はさらにあるものではなかろう●ある老翁の述懐に、世界のどこの国も三十数年前の情況に似たゆき詰りを露呈している。その打開策が第二次世界大戦の二の舞になって争乱とならねばよいが。争乱の歴史は繰り返してもらいたくない。

（白鷺）

第三回 宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

徳重　石松　寿子
外国の人もカメラにおさめるかり左近桜の花のさかりを

宮田　片山　朔子
上海に着きたるまゝの夫想う花々撮りて黄砂覆う日に

箱崎　吉村　三郎
春暁に床虚へば宮太鼓遠く近かきに小窓流れる

原町　八波　五月
繰り返す寒さの定まらずようやく春の衣更へする

武丸　原田まつ代
老友の帰りてさびし縁に立ち入り日の禹空一人見つめり

吉留　高山　信子
鈴蘭の株鉢に取り孫にもたせば白く小さな花のぞき見る

武丸　原田　リノ
身のやせてあらはに出でし血管に注射されを眼そらして

須恵　早川　フサ
薫風に乗って来たりし心地する二人の娘より母の日の祝

戸畑　田中ハツセ
外観の見事なるビル内暗く襖電球は点々と光る

福間　二宮　末子
老友の帰りてさびし縁に立ち入り日の禹空一人見つめり

福間　二宮　末子
蛍鳥のむせび鳴くよな小夜風吹き命の今消えなんとす

香椎　桜井　ツ子
けゝ吹くは春何番の風なられ貝の風鈴を絶へず鳴らしをり

田熊　今村　重刀
唐津城の天主にたぼ弧をなして白砂につづく虹の松原

田熊　鷲津かつ代
湯布院の駅を出づるやまなかひに由布岳そびゆかゝるをとゝ

福岡　吉田　信夫
仕事終へ廊下に出てたゝずぬ西陽まぶしく照り返し来る

田久　橋本　良輔
電話して友訪ねれば門前に幕の目あり新しかりき

田島　吉武　武雄
あの頃は人眼はばかり語り得ず今なればこそ夢を追ひつつ

田熊　吉田　直志
かゞわしき木の香に満つる新築の桧柱に朝光（かげ）のさす

徳重　石松　寿子
外国の人もカメラにおさめるかり左近桜の花のさかりを

宮田　片山　朔子
上海に着きたるまゝの夫想う花々撮りて黄砂覆う日に

箱崎　吉村　三郎
春暁に床虚へば宮太鼓遠く近かきに小窓流れる

原町　八波　五月
繰り返す寒さの定まらずようやく春の衣更へする

武丸　原田まつ代
老友の帰りてさびし縁に立ち入り日の禹空一人見つめり

吉留　高山　信子
鈴蘭の株鉢に取り孫にもたせば白く小さな花のぞき見る

武丸　原田　リノ
身のやせてあらはに出でし血管に注射されを眼そらして

須恵　早川　フサ
薫風に乗って来たりし心地する二人の娘より母の日の祝

戸畑　田中ハツセ
外観の見事なるビル内暗く襖電球は点々と光る

福間　二宮　末子
老友の帰りてさびし縁に立ち入り日の禹空一人見つめり

福間　二宮　末子
蛍鳥のむせび鳴くよな小夜風吹き命の今消えなんとす

香椎　桜井　ツ子
けゝ吹くは春何番の風なられ貝の風鈴を絶へず鳴らしをり

田熊　今村　重刀
唐津城の天主にたぼ弧をなして白砂につづく虹の松原

田熊　鷲津かつ代
湯布院の駅を出づるやまなかひに由布岳そびゆかゝるをとゝ

福岡　吉田　信夫
仕事終へ廊下に出てたゝずぬ西陽まぶしく照り返し来る

田久　橋本　良輔
電話して友訪ねれば門前に幕の目あり新しかりき

田島　吉武　武雄
あの頃は人眼はばかり語り得ず今なればこそ夢を追ひつつ

田熊　吉田　直志
かゞわしき木の香に満つる新築の桧柱に朝光（かげ）のさす

吉武　白木うゆの
働けば食べ会に困らず背を伸ばし生きんと思ゝ朝の草刈る

八幡　安川　浄生
蛙の声忍ち止みて遠くより音たゞて来る雨いさきよし

福間　山本　夏枝
桑の葉の青きかがやきに思いをり箱に飼ひにし蚕のゆくえ

田久　立花　勇雄
田作りも来年は子に譲ると語りつつ妻と苺の種子まく

東郷　藤崎　辰子
砂深くもぐれる海老が電磁棒の電流に触れて跳び出だしたる

池田　永富　錄
平常に戻れるわれの血圧を告げゐる女医の言葉おだしき

福岡　林　まつえ
筑紫野は霞にけむりてはろゝといにしえ人は大野と呼びし

津丸　藤田　肇
登りゆく吾が目交にひらひつつ霜の彼方は空となる海

田久　小方　実
祝敬老の貼紙大きく書かれた竹桜の花も美しく咲きて

田熊　力丸　一郎
春深む唐津の城に藤を見る花を透かして海はきらめく

津屋崎　谷口　礼子
都路を訪ねん君は長き床詠みし鳩の巣五月の陽光る

宗像　中村　幸
池の水に青めるは葦とも菖蒲とも見えて夕べの雨さたり

田島　楠　理
梢差す朝日流れて下草を刈る鎌先で目を射る光り

武丸　立石ろせ乃
開ききりしバラは朝餉の卓に散る緋の色あせぬまゝの一ひら

深田　中野　節子
わが宿の硝子戸を起こし遠くにはロープウエーの燈がつらなりて見ゆ

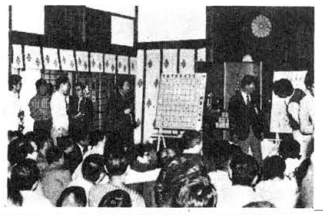
名古屋　野崎　傳三
浮見堂をめぐる蓮間のさざ波にゆたひてをり鳩の流巣

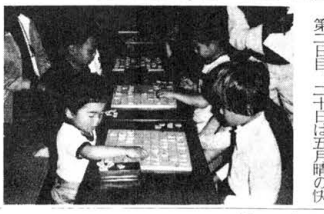
新鋭・強豪の激突!!
第二回宗像王将戦

〃第二期宗像王将位に守田富作氏（宮崎県代表）〃
―併催・第一回宗像ちびっ子王将戦も行なわる―

九州七県の地区予選の激戦を勝ち抜き、将棋の九州ナンバー・ワンの王座をかけた、第二回宗像王将戦（宗像大社・西日本新聞社主催）主管・日本将棋連盟福岡県支部・審判長に日本将棋連盟升田九段を迎え、代表選手十六名参加のもと、五月十九日の前夜祭に引続き、二十日午前八時より宗像大社清明殿において、「第二期宗像王将位」をかけた激戦が開催され、第二期宗像王将位には、守田富作五段（宮崎県・三十六才）が見事栄誉を獲得した。

五月十九日午后六時、九州七県の代表選手十六名（第一期王将位の大石五段大分県の参加で、十七名のところ大分県一名の棄権で十六名）の受付が完了し、午后六時半より奉告祭が斎行され前夜祭が始まった。又大社斎館において升田九段の将棋に対する心構え、九段の少年期より現在に至る経緯、又同伴の九段婦人の御苦労話等、九段独特の話術に深い感銘を受けた。自己紹介、第一回の組合せ等、第二期宗像王将位には、守田富作五段（宮崎県・三十六才）が見事栄誉を獲得した。





五月十九日午后六時、九州七県の代表選手十六名（第一期王将位の大石五段大分県の参加で、十七名のところ大分県一名の棄権で十六名）の受付が完了し、午后六時半より奉告祭が斎行され前夜祭が始まった。又大社斎館において升田九段の将棋に対する心構え、九段の少年期より現在に至る経緯、又同伴の九段婦人の御苦労話等、九段独特の話術に深い感銘を受けた。自己紹介、第一回の組合せ等、第二期宗像王将位には、守田富作五段（宮崎県・三十六才）が見事栄誉を獲得した。

長谷川法世氏外十一名の一流イラストレーター作品

「交通安全願い絵馬」奉納式

――同時に県内一般作品八〇〇余点も奉納――

交通安全の祈りを込めた「交通安全願い絵馬」の奉納式が、全国一斉に実施された春の交通安全旬間が終って間もない、去る六月二十二日午後二時より当天社本殿に於いて厳粛裡に斎行された。

この「交通安全願い絵馬」奉納式は、福岡トヨペット株式会社（代表取締役鈴木快康氏・本社＝福岡市博多区東光二丁目）が、昨年より独自に交通安全啓蒙促進の企画として、久里洋二、長谷川法世（福岡市出身）氏等現活躍中の一流イラストレーター十二名に依頼して描かれた「絵馬」十二枚を新聞紙上並に同社の各支店・営業所等に順次掲載掲示し啓蒙キャンペーンを繰り広げてきたが、非常に好評を博し所期の目的を完遂したのでこの絵馬を交通安全の守護神として崇拝されている宗像大社へ奉納したいとの申し出により納り行なわれた。

今度奉納された「願い絵馬」は福岡トヨペット株式会社が交通安全キャンペーンを実施するに当り、種々検討を重ねた結果、各神社仏閣等に奉納されている諸祈願の絵馬にヒントを得て企画したもので、十二枚の絵馬はそれぞれ制作者の個性溢れるユニークなタッチで描かれた作品で、見る人の目と心を楽しませながら交通安全への啓蒙を見事に表現した秀作である。

当天社ではこの奉納された「交通安全願い絵馬」十二枚を、交通安全祈願に参拝される多くの人々に拝観して頂き少しでも交通安全への理解並に協力に役立ればと展示しております。

又、福岡トヨペット株式会社傘下各支店、営業所を通じ広くオーナードライバー、児童等からも「交通安全願い絵馬」の作品を募り百余点の絵馬が同社に寄せられたが、この絵馬も奉納式当日に当天社へ納められた。当天社ではこの中の優秀作品二百点をイラストレーターの作品と共に展示している。

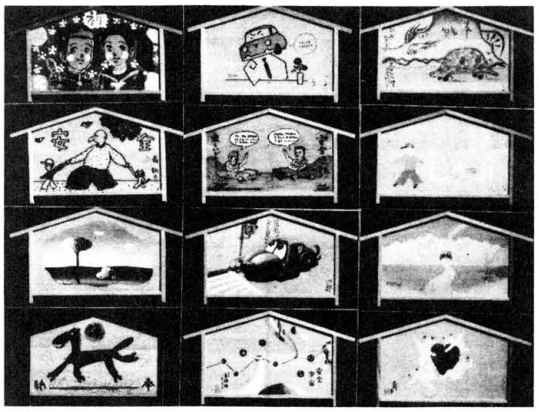
――◇――◇――

（写真説明）　敬称略

左上より
長谷川法世・長新太・久里洋二・和田誠

中上より
原田治・湯村輝彦・辰巳四郎・真鍋博

右上より
黒田征太郎・灘本唯人・矢吹申彦・横尾忠則　以上



中近東文化センター上棟祭斎行

―東京―

出光美術館三鷹分館（中近東文化センター）の上棟祭は、前日来の豪雨も上った五月晴の五月九日、曇くも三笠宮殿下、同妃殿下の御臨席を賜わり、当天社饗之祢宜以下神職四名奉仕の下厳かに執行された。

この文化センターは三鷹市の国際キリスト教大学の閑静な校地の一部を出光美術館が譲りうけ、昨年七月二十八日地鎮祭が斎行され鹿島建設（株）の手により建設中のもので、鉄筋二階建、延べ百坪に及ぶ堂々たる建物で、此度、目出たく上棟祭の運びとなったものである。

我が国と中近東諸国との文化的交流、政治経済のつながりは、第二次世界大戦以来特に密接になり、数多くの学術調査団が中近東を訪れ、その成果は世界的な水準に到達しつつあるも、未だ欧米諸国に比較してかなりの遅れを認めなければならないが、この様な状況の中で特に、出光美術館に於いては、中近東の古代文明の資料並に美術工芸品の蒐集保存に力を注ぎ、その蒐集品は質・量とも国内では最高の物を所蔵している。

なお「財団法人中近東文化センター」が三笠宮殿下の御発意により創設され、この殿堂は、中近東文化の調査研究の場となり、又考古学資料、美術工芸品等の保管及び一般公開が行われる事になっている。

尚、同文化センターは本年九月竣功、十月開館の予定である。

国道三号線に於いて春の交通安全キャンペーン

全国一斉に行なわれた「春の交通安全運動」（五月十一日～二十日）の中日にあたる、五月十五日午後二時より国道三号線の城山峠（宗像郡宗像町）下り線に於いて「交通安全啓蒙キャンペーン」が実施された。

この交通安全キャンペーンは、宗像大社と宗像警察署並に郡交通安全協会の共催によるもので、今回は宗像青年会議所、宗像乗用車協会が特別に協賛・協力して行なわれた。

当日は午前中まで雨模様の天候で実施が危ぶまれたが、正后近くには天気も快復、実施時には快晴となり絶好のキャンペーン日和となった。

キャンペーンは当天社より、白衣袴姿の神職四名と、紺袴姿の巫女四名が出向、宗像署から大西交通課々長以下署員一名交通巡視員二名、安全協会、青年会議所会員等三十余名が参加して実施された。

宗像署員の誘導によって次々に停車する、トラック、自家用車等の車輌の運転者並に同乗者に、当天社が特別に調製した二〇〇〇体の「お守札」「ステッカー」が"無事故無違反運転のお守りに"と神職巫女より授与されると、どの運転手も"ありがとう、安全運転に心がけます"と擁っていた。又参加者より手渡される、冷たいヤクルトに感謝しながら暫を潤していた。

沖津宮参拝の記

太宰府天満宮　権祢宜　馬場宣彦

『本日天気晴朗ナレドモ浪高シテ浪静カ』と云うけれども「本日天気晴朗ニシテ浪静カ」

今回この福岡県神道青年会創立二十五周年記念行事としての宗像大社沖津宮参拝に参加した者は余程潔斎が良かったのかもしれない。

五月二十二日、快晴、午前七時四十五分宗像大社祈願殿前集合、田村清邦会長外会員二十三名並に林田守邦前会長、本殿に参拝し修祓を受け直ちに神湊へ出発。船は「大栄丸」船長の田志力男さんを始め乗組員皆さんに挨拶、八時五分出港、そして玄界灘は最初に書いたとおり「天気晴朗ニシテ浪静カ」。案内の宗像大社、石橋権祢宜の話によると珍らしいくらいの凪とのこと。筆者は前夜、どうせ船酔するのなら宴情を決め、同大栄丸に、この潔斎がよかったのか、一様、この潔斎がよかったのか、十時二十分、沖ノ島着。岸壁には沖津宮勤務当番の本多権祢宜に出迎えていただいた。本多先輩は沖ノ島五日目とのことであったが、かなり日焼けし、鼻の下には薄っぺらなひげを生やしたりして、早速海につかり禊、五月の海はまだ冷たかった。身を清め、いよいよ本殿へ参道を登る。本殿に正式参拝の後、本多氏に御田植又祭祀遺跡について説明を受ける。沖ノ島は「理してもらって直会。この気分最高、こんな素晴しい直会は初めての経験である。その時の大栄丸船長の話「まあ、酒は五升が適量やな」これは一同唖然、又本多先輩が韓国船から献上されたという秘蔵のウイスキー「バランタイン」が出たりして最高の直会の後であった。その後しばらく休憩して午後三時より帰途につく。船長の計いでこの神島を一周して頂く。五時過ぎ神湊着。永年の念願であった沖津宮参拝は無事終了した。

ここに全神協三十周年、県神青会二十五周年の御理解頂き御協賛下さいました各神社、各支部他多くの方々とさらには宗像大社幕津宮司様をはじめ職員の方々のお蔭と深く感謝申し上げます。

郡内各町村議会の新しい正・副議長決まる

―郡内―

去る四月に実施された統一地方選挙で、郡内五ケ町村の議会議員が本誌既報の通り決定、この新議員さんによって各町村議会が逐次開催され議会の最高責任者である正・副議長が新しく決定致しました。今後四年間の郡内地方自治発展に尽力されます各町村の正・副議長さんを紹介致します。

――◇――◇――

宗像町議会
議長　谷口晤郎
副議長　合馬弘

福間町議会
議長　壇克己
副議長　伊東増雄

津屋崎町議会
議長　花田茂
副議長　上妻直喜

玄海町議会
議長　花田光夫
副議長　綱脇開

大島村議会
議長　屋形繁人
副議長　河辺治　以上　敬称略

今度各町村議会の正・副議長にご就任されました各位に祝詞申し上げますと共に、今後益々のご活躍と町村政のご発展を祈念致します。

町の話題

（各町々報より抜萃編集）

国鉄東郷駅日の里側に屋根付無料自転車置場完成

―宗像町―

この屋根付自転車置場は東郷駅日の里側広場、赤間駅寄りの町有地に建設され、総工費一四〇〇万円で、この程完成したのは第一期工事分の長さ七〇メートル、幅六・一メートル、四六〇台収容のスレート瓦屋根一棟である。今年度中は長さ二一七メートルに拡張、六〇〇台の自転車が収容される。

東郷駅周辺は西日本有数の日の里団地を始め大小の団地が建設されて、福岡・北九州方面への通勤通学者の玄関口として年々利用者が増大、駅舎も八年余り以前に建替工事が決まり現在今年十月の新駅舎開業を目指し着々と工事が進行している。又、同駅周辺は利用者が駅までの足としてマイカーや自転車を利用する為、周辺の混雑がひどく二年前に一帯が駐車禁止区域に指定されており、自転車利用者が急増して駅前広場や周辺道路、歩道は自転車で溢れ人の通行に支障をきたしていた。この為宗像町では何等かの対策に迫られていたが昨年度から自転車駐車場整備に国から補助金が出る条例が出来、又駅舎改築の竣工も間近となったので、補助金制度適用の第一号自転車置場を東郷駅日の里側に設置したのである。

同町では今度の自転車置場だけでは、年々増加する同駅利用者の自転車整理には不足であるとして第二の自転車置場の設置も速からず実施しなくては考えているが、赤間駅周辺も混雑がひどく今年中に約三〇〇台収容出来る同様の自転車置場を設置する計画である。

神社（じんじゃ）(3)

神（賀木・坂木）先月より続き後世、屋内で神をまつるにあたり、案（あん）の上にサカキを立てるのも、これから出たといわれる。神を拝する時、サカキの枝に木綿（ゆう）または紙の四手（しで）をかけたもの（これを玉串という）を捧げ、或は神前の左右にサカキを立てて、五色の絹や鏡・玉・剣をかけたりする。

神木とか霊木とかいわれるのは、神霊の降臨と深い関係があり、これを神体と見なすこともあった。中世、奈良興福寺の衆徒が強訴のときに奉じた春日神社の神木は榊で、神体に擬したものであった。

注連縄（しめなわ）

浄と不浄とを区分するため神聖な区域にかけわたす特別の藁縄。稲藁の新しいのをえらび、特に打たず、左ないにない、両端は切らないでおくことなどが必要で、適当な間隔に別の藁を七本・五本・三本とたらし、さらに四手（もとは木綿。今は紙で作る）をはさむ。七五三縄と書く所もある。

形によって前垂（まえだれ）・牛蒡（ごぼう）・大根・輪などの称がある。

後世、縄は正なり直なりといい、二筋の藁は陰陽和合の意といい、両端を切らないのは質素の意というが、付会の説で、標縄の字をあてるように、本来は神の神聖・清浄な区域、不浄や悪魔の入れない場所を示す標識である。

正月の「しめかざり」に海老（えび）・橙子（だいだい）・昆布などをつけるのは、歳徳神を迎える場所を示している。

信仰

幣（へい）

「みてぐら」「にぎて」「ぬさ」とも訓む。「幣」は「おくりもの」の意で、神にたてまつる財物を指し、幣帛・幣束などの語があり、俗に「御幣かつぎ」などいう御幣もある。

古代では布帛の類が貴重な財物であったから、これを神前にささげて崇敬の意を表することがあった。この布帛は「ぬさ」「にぎて」「みてぐら」とも称し、幣帛の字をあてた。また神前にささげる場合、木や竹の棒に結びつけたり、或は挿んだりしたので幣束（へいそく）とか幣串（へいくし）とも称され、後には紙の四手（しで）をつけ、俗に御幣というのは迷信の意であるが、陰陽師（おんみょうじ）の類が五色の御幣などを作って、儀礼をまどわしたりしたことから出たものであろう。

神酒（しんしゅ）

神にたてまつる酒。「みき」「おみき」ともいう。神饌のうち、米に次いで大切なものとされる。神饌のことを古くは「みけ」といった。御食の意である。

神饌としては、稲・米・魚介・鳥獣・蔬菜・果実・塩水・酒などをたてまつるのが普通であるが、「みけ」と「みき」とを併称する場合もあるから、特に「みき」は独立した重要性を認められていたのであろう。

神に飲食物をささげるのは「まつり」の重要な部分であり、あらゆる生産は「まつり」のための準備と信じられていた。神酒を醸造することも「まつり」の準備の一つであった。

須佐神社（島根県）には造酒会神事（みきあいのしんじ）というものが伝承されているが、これなどは明らかに新嘗祭（にいなめのまつり）の一種であって、神酒を醸造することが「まつり」の準備の重要な一部であったことを証している。

最も典型的なのは天皇一代一度の大嘗祭（おおにえのまつり）において、白酒（しろき）・黒酒（くろき）を特設の酒殿（さかどの）で醸造し、神前に供えることである。伊勢神宮をはじめ各地の大社には酒殿を有するものが多い。

× ×

宗像大社歌会 俳句作品集（一九七）

神祀る祢宜の狩衣や椿若葉　藤沢　玄洋子

鯉のぼり指さす父よまだ若し　福岡　入江　柳江

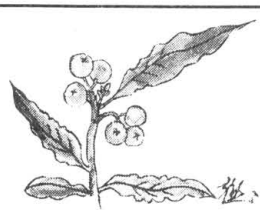
長閑さや雲雀さへずり蝶も舞ふ　土穴　八尋　恒夫

渚行嘲月夜の二人連れ　田島　吉武　武雄

藤仰ぐその目で仰ぐ唐津城　田熊　力丸　一郎

献饌の西瓜を三宝もてあます　名古屋　野崎　傳三

古き歌友とうたいて藤見宴　田熊　安部　ゆき



浜の寄物

軍艦出雲―ある巡洋艦の生涯（二）

(22)

いしいただし

明治二八年日清戦争は、日本の勝利に終り、同年四月十七日、下関で講和条約が調印された。調印の一週間後の二三日、戦勝に酔った国民は冷水をぶっかけられるような通告を受けとった。露仏独の三国干渉である。日本の前面に不気味にロシアが立ちはだかる。「臥新嘗膽」を合言葉に、対露軍備拡張が急速に行われていった。

明治二八年の総歳出が九一、六三一（単位千円）そのうち軍事費が二九、四四〇であったものが、二九年には二〇三、四五八、軍事費は九八、一〇六となり比率は四八％にもなっている。

明治二八年一二月、海軍の第一期拡張案は七年計画九千五百万円が協賛され、翌二九年、第二期案一〇年計画一億二千八百万円が議会を通過し、計二億二千三百万円で軍艦百数隻、一五万トンを建造するのである。その内訳を見ると

戦艦四隻（敷島、朝日、初瀬、三笠）
重巡六隻（八雲、吾妻、浅間、常磐、出雲）
通報艦一隻（千早）
河用砲艦三隻（宇治、伏見、隅田）
駆逐艦二三隻（叢雲級）
水雷艇一六隻（白鷹級）
同小型四七隻（百トン級）

その他雑船五八四隻

戦艦をイギリスに、重巡六隻をイギリス、フランス、ドイツ。快速軽巡三隻をイギリス、アメリカへ、新高、対馬、音羽等は国内で建造された。駆逐艦三隻中七隻水雷艇六三隻中二隻が国産であった。出雲はこのような計画のもとに建造された二艦である。

出雲が横須賀へ回航されて四年後の明治三七年（一九〇四）二月一〇日、日露戦争が起った。日本艦隊は次のように編成されている。

第一艦隊（東郷平八郎中将）
戦艦六、三笠、朝日、敷島、初潮、富士、八島、（第一戦隊）
軽巡四、千歳、高砂、笠置、吉野、（第三戦隊）
通報艦一、龍田
駆逐三隊、白雲、朝潮、霞、暁、雷鳴、雷、曙、薄雲、東雲、漣
水雷二隊、鵠、真鶴、千鳥、第六七、六八、六九、七〇
第二艦隊（上村彦之丞中将）
重巡六、出雲、吾妻、浅間、八雲、常磐、磐手（第二戦隊）
軽巡四、浪速、高千穂、新高、明石（第四戦隊）
通報艦、千早
駆逐三隊、速鳥、春雨、村雨、朝霧、陽炎、叢雲、夕霧、不知火
水雷三隊、第六二、六三、六四、六五、蕨鷹、鴿、雁、蒸
特務艦船、大島、赤城、春日丸
第三艦隊（片岡七郎中将）
旧式戦艦四、厳島、鎮遠、松島、橋立、（第五戦隊）
軽巡四、和泉、須磨、秋津洲、千代田（第六戦隊）他
雑艦（第七戦隊）一〇
通報艦一、水雷二隊一二、特務艦船二、排水総量約三万三千余トン。主力戦艦六、重巡六は世界最新鋭艦である。しかも東郷大将以下各艦長から兵に至るまで、日清戦争を経験した歴戦の勇士であった。

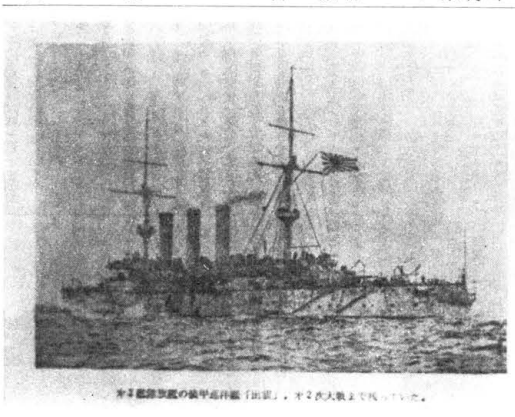
対するロシアの海軍力は、太平洋、バルチック、黒海艦隊の艦艇は駆逐艦以上一三〇隻、排水量六〇万トン、戦艦一二隻、重巡一〇隻の主力艦を有する世界最強の艦隊であった。

うち極東に配置されたロシア太平洋艦隊はペトロパウロスク、レトウイザン、セバストポリ等の戦艦七隻をはじめとする一九万一千トンの艦隊である。

註1対露宣戦布告は二月十日、二月九日には仁川沖海戦がおこなわれている。

註2艦隊編成は第一、第二、第三艦隊とし、第一、第二艦隊で連合艦隊が編成され、司令長官は東郷平八郎中将。第三艦隊は、呉軍港および竹敷要港（対馬）に待機していた。

参考文献
日本の海軍（上）池田清、至誠堂
大海軍を想う伊藤正徳、文芸春秋



第3艦隊旗艦の装甲巡洋艦「出雲」。第2次大戦まで残っていた。

鐘崎民俗誌 その十四

楠本　記

釣漁（その一）

「サワラの皿ねぶりと言う言葉があります。」と大島の越智泓愛先生（明治四十三年生）にうかがった。旬のサワラは食べたあとの皿をなめるほど美味であるということらしい。そこで食べる前にサワラ釣の話を聞きたいと思い梅雨空の一日、京泊に比田一郎さん（明治三十六年生）を訪ね、年季の入った漁師さんを示している数々の表彰状の下で話を聞いた。

「サワラ釣は十四・五才の頃からやりました。当時は和船でしたので四尺肩くらいの舟に帆をかけて、地島のふちと大島の近所漁をしました。ブリはサザ追いと言って沖の方にいますが、サワラは地の方にいます。

道具はドンガラガンと言って、三味線の皮の古くなって役にたたんようになったものを切ってダマシ餌をつくりました。三味線の皮を細長く切ったものを五・六枚釣針にくっつけて、中筆くらいのシノ竹に通します。この竹のことをクラと呼んでいます。そしてこの釣針をミチナマリ、ヨマビキモリをつけたものですがこれに結んで四尋くらいの竿につけて用のトリカンとオモカンの両方から一本つつ四十尋くらい流します。そうしますとドンガラガンの三味線の皮が海の中でひらひらと動き、ちょうどイワシが尻を振って泳ぐように見えるので、それにだまされてサワラが釣れるわけです。魚がくいますとミチナマリに用の方からひいていますヨマでぐりよせて釣りあげるわけです。このヨマのことをトッタリと呼んでいます。

サワラ釣は流しで釣るのですから問題はありませんが、エソ釣とかサワラ釣は時期は主に秋にやっていました。ブリ釣は生餌を使いました。七〇尋から八〇尋ほど流すのですが道具が重いので力がいりました。ブリがあたった時は、二度キリといいまして最初に一度力いっぱい引き、そして改めても一度ひいてあげます。

和船をやめて機械船にしたのは二十一才の時でした。当時百五十円でヤンマーの二馬力半のチャッカーでした。鐘崎で魚とりの発動機船が一番最初にできたのは祝川の下の占部造船所でできたと鐘崎丸で、たしか大正十年だったと思います。この船は肩が四尺二・三寸の小さい船でした。あの時は高岡万吉さんが大阪まで機械を買にいったの覚えています。

魚はあの時分は大層とれました。大漁しますと呼子か下関に入りました。鐘崎ははじめ機械船になっただけよりも良かったわけです。漁場には早くつくし、朝売には間にあうしいいことずくめでした。」

七田さんの話を聞いて明治初期の模様を調べるため福岡県漁業誌筑前国の部（明治十一年編）を繙くと、鱈、鰯掩網の項に、「漁業ノ季節ハ小寒ノ頃二始メ大雪ノ頃ニ終ル漁場ハ神合深サ二尋乃至七八十尋トス漁船一艘四人（一人梶取三人ハ釣子）乗二シテ各釣綸一ワクヲ携ヘ昼間出漁又漁人ハ皆船ノ各所ニ位置ヲ定メ鰯ヌサザの塩漬ヲ餌トス（鰯ノ尾ヨリ二刺ヲ而テ糸ニテ巻キ鮫皮ノ袋ヲ鰯頭ニ冠フシメ釣糸破損セサルノ防備トス）而テ釣綸ヲ海中ニ下ス魚水底ニ遊泳スル目アリ又海水中央ニ遊泳スル目アリ故二始メ重イ漁具ト軽イ漁具ヲ下シ魚ノ遊泳ヲ試ム中暑風アルトキハ帆ヲ揚ケ風ナキトキハ指左手ニ櫓ヲ握リ右手ニ綸ヲ下シ船ヲ走ラス魚餌ニ触レタルトキハ綸ニ抵抗スルヲ以テ徐カニ綸ヲ伸縮スル事少時間魚ノ漸ク疲癈スルヲ待チ水際ニ引寄セ釣ヲ頭部ニ打着ケテ之ヲ捕ル魚若シ大ニシテ綸ヲ引ク事強ケレハ暫ク船ヲ留メ魚ノ遊泳スル方位ニ船ノ方向ヲ替ヘ魚体ノ弱ルヲ待テ捕魚又凡ソ綸ヲ挽ク勢ニテ何魚ノ始ニ付キタル事ヲ知ルベシ鰆ハ一旦甚ク強ク餌ハ始メ柔ニシテ后強シ一日ニテ十五六尾ヲ得ルハ上漁ダリ」

と大略以上のように述べられている。この漁法は今日ドンガラガンがサワラ底こき釣漁業と呼ばれるのに対して、サワラ一本釣漁業と呼ばれるもので、明治初期には玄界灘沿岸において盛況であったことが解る。

ドンガラガン

大島捕鯨資料 その三

左の図のうち第6図までは「西洋式捕鯨営業二付願」に添付してある図面である。図1・2・3はいずれも手銛である。

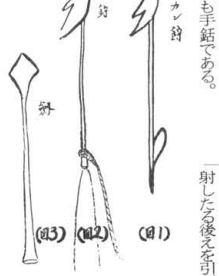


図4は銛の頭部が動くことを示している。これにより捕鯨銃には二種類あったことがわかる。即ち鯨体に突き刺った時に抜けるのを防止することができる。

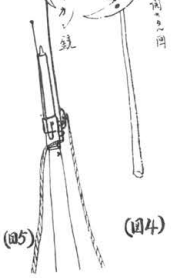
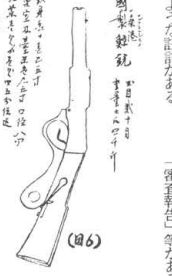


図5は明治二十九年大日本水産会が編纂をした「捕鯨志」によれば管見ではあるが一捕鯨誌」のほか明治二十三年長崎県農商課が編纂した「漁業誌」竹中邦香の「房南捕鯨誌」第二回水産博覧会（明治三十年）「瀬戸内捕鯨組審査報告」等がある。

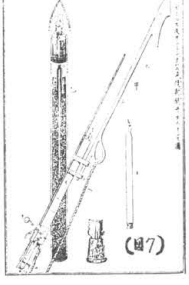


(図6)

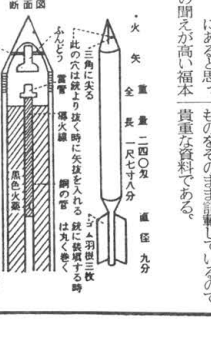
ボンプランスの大きい特徴は鯨体内に撃ち込まれたボンプランスが内部で爆発して殺すところにあると思っているが、名著の聞えが高い福本和夫の「日本捕鯨史話」にはボンプランスという言葉の成り立ちが、ボンプは爆弾、ランスは銛だから銛を爆薬で、弾丸のごとく発射するというところから、つけられた名称にちがいない。従来、とどめを刺すのに用いられたのは、ハンドランス（即ち手銛である）ハンドランスにかわるボンプランスなのである。〈と言い更に八一また、米国式のボンプランスすなわち「破裂銛」などというのが、いかに大きな間違いであるかも、もはや多く説くまでもないことと信ずる。〈（註二）と述べているのは当を得ないのではなかろうか。これについては、「房南捕鯨誌」のなかの次の文章がこれを裏書している八一火箭の破裂せし傍近の肉を焼するに敢えて塩硝の臭気を帯ることなし。只方二尺許の間は肉だけで食うにたえざるものの如し。長銛のつかちなる傍近のみ甚しからざれとも亦だれたるの状あり。故に旧来の法に捕りし鯨に比すれば精肉を得ること四・五樽の損耗ありと言えり。〈これによって鯨体内で爆発をしているのがよく解る。

ボンプランスの図面は十指にあまるほどあるが、そのいづれを見ても僅かづつの相違が見られる。この間の事情を記録（註二）によって調べると「前略、従来使用せる鉄砲は皆船来品なれども重量過大使用不便にして時としては其反動力のため銃手の倒るるが如き危険あるを以て明治二十六年これが改良に注意し焦慮経験の末銃身の台尻を五分短め、筒尻を距る六寸位の処より筒先まで漸次銃身の厚さを減し重量凡そ三百匁を減じ以て便利と安全を得たり。」とありまた火箭も明治二十年以降改良を重ね明治二十五年に至って完成をさせている。

本稿の第5、6図は米国輸入のものをそのまま記載しているので貴重な資料である。



(図7)



註一、日本捕鯨史話七十九頁
註二、第二回水産博覧会（明治三十年）瀬戸内捕鯨組審査報告

参考、右図はボンプランスの図で「森信義著芝戸植松捕鯨組」より転載